# 2025
# 草むらの學校

## 自然資本活用レポート

丹波篠山市倉本の里山フィールドで、人と自然の関係性をつくりながら記録してきた 1 年間の活動報告。

| | | | |
|---|---|---|---|
| **25** 回 | **231** 名 | **95** % | **22** 種 |
| 開催回数 | 延べ参加者 | 市外参加者 | 確認樹木種 |

発行 株式会社ミドリカフェ
対象期間 2025 年 1 月〜12 月
所在地 兵庫県丹波篠山市倉本 141 西紀中地区 活動面積 0.5ha
連絡先 info@midoricafe.jp ／ midoricafe.jp

CONTENTS

# 目次


01 この場所と、活動について
*About the place and our work*

02 活動の記録
*Records of 25 sessions*

03 自然資本のデータ
*Natural capital, in numbers*

04 SDGs・TNFD との対応
*Aligned with global frameworks*

05 来年度に向けて
*Plans for 2026*

06 次の人へ — 引き継ぎ書
*A letter to the next steward*

— ミドリカフェからのご提案
*What we can offer*


**NOTE** 本レポートは SDGs や TNFD への「準拠」を宣言するものではありません。それらのフレームワークを参考に、活動が自然・社会とどうつながっているかを整理したものです。数値はいずれも参考推計値であり、実測値ではありません。

CHAPTER 01

# この場所と、活動について

*About the place and our work*

草むらの學校が育まれてきた里山フィールドと、1 年間の歩み

丹波篠山市倉本の里山で、2025 年 1 月から一年間活動を行いました。

「草むらの學校」は名前のとおり、自然そのものが先生です。

## ◆ フィールドの概要

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 所在地 | 兵庫県丹波篠山市倉本 141（西紀中地区） |
| 活動面積 | 0.5ha（里山林・草地・活動エリア） |
| 植生 | 広葉樹・針葉樹混交林（確認樹木 22 種） |
| ハザードマップ | 土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）に指定 |
| 活動開始 | 2025 年 1 月 |

**HAZARD MAP**

本フィールドは土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）に指定されています。継続的な里山整備は、防災機能の維持に直接寄与する重要な活動です（詳細は Chapter 03 を参照）。

## ◆ 活動の概要（2025 年 1〜12 月）

| 25 回 | 231 名 | 4 部門 | 0.5 ha |
|---|---|---|---|
| 開催回数 | 延べ参加者 | 活動カテゴリ | 活動面積 |

— ツリーハウス部（20 回）

— きのこ部（2 回）

— 生きもの部（2 回）

— 山賊ワイルドラン（1 回）

## ◆ 誰が来ているか

231 名のうち、95%が丹波篠山市の外からやってきました。神戸・大阪・東京——都市に暮らす人々が、週末にこの場所を訪ねてきます。20 代が中心（65%）で、子ども連れの家族（20%）も増えてきました。地域住民の参加はまだ 5%と少ないですが、都市と農村をつなぐ“入口”として。まずは市外参加者との接点形成が進んでいます。

| 属性 | 割合 | 推計人数 | 特徴 |
|---|---|---|---|
| 20 代 | 65% | 約 150 名 | 都市在住・自然体験への関心層 |
| 子ども | 20% | 約 46 名 | 家族連れ・親子参加が増加傾向 |
| 30〜50 代 | 10% | 約 23 名 | 子育て世代・地域関心層 |
| 地域住民（市内） | 5% | 約 12 名 | 西紀中地区・近隣在住者 |

**NOTE** 市外参加者（約 219 名）の多くは、交通・飲食・土産品等を通じて丹波篠山の地域経済に貢献しています。地域内消費の推計は参考値 約 67 万円（市外 219 名×3,000 円 ＋ 市内 12 名 ×1,000 円）。

CHAPTER 02

# 活動の記録

*Records of 25 sessions*

4 つの部門と、25 回の積み重ね

木を切り倒す音。丸太を玉切りにして、路を切り拓く。あふれる笑顔と達成感。この 1 年間に積み重なった、25 回の記録です。

## ツリーハウス部（20 回）

— 里山の木を使ったツリーハウスの設計・建設

— 道具の使い方・木材加工の基礎

— 仲間と力を合わせてつくる体験

— 活動中の樹木伐採: 14 本

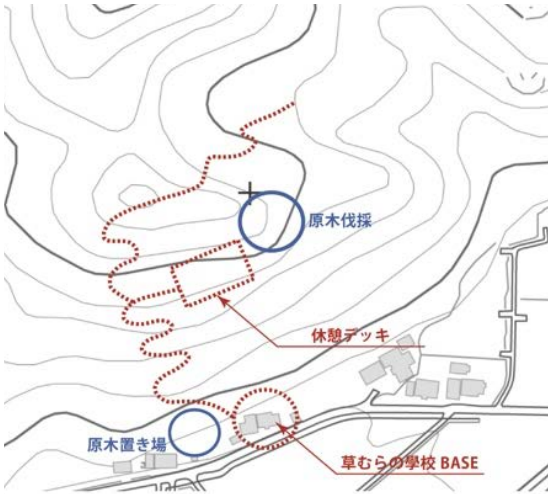
## きのこ部（2 回）

— 広葉樹の原木へのきのこ菌の植菌

— 菌の生態・森の循環を学ぶ

— 数ヶ月後の収穫まで続く関わり

— 活動中の樹木伐採: 8 本



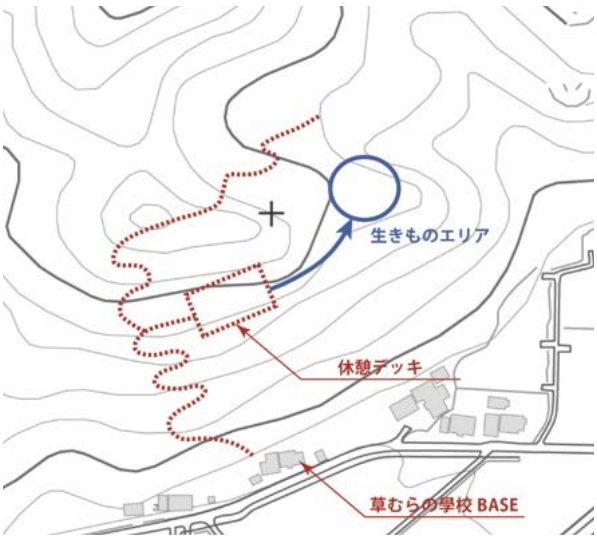
## 生きもの部（2 回）

— 里山の昆虫・植物の観察と記録

— ネイチャーガイドとともに歩く

— 生物多様性の現状を体感する

— 活動中の樹木伐採: 20 本



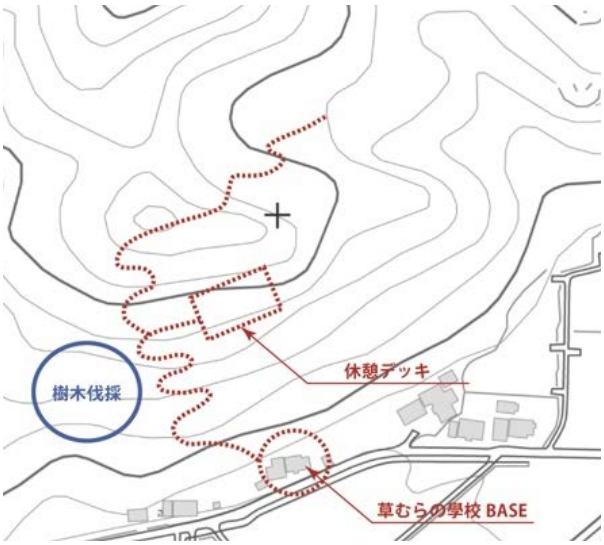
## 山賊ワイルドラン（1 回）

— 常緑広葉樹 30 本の伐採・搬出

— 光環境の改善・林床植生の回復促進

— 体を使って森の整備に直接関わる

— 活動中の樹木伐採: **30 本**



4 部門合計伐採本数

**72**本

ツリーハウス 14 ＋ きのこ 8 ＋ 生きもの 20 ＋ 山賊 30

CHAPTER 03

# 自然資本のデータ

*Natural capital, in numbers*

この里山が持つ力を、できる限り数字で記録する

**NOTE** 本章の数値（$CO_2$固定量・生態系サービス価値など）は、林野庁・環境省・国土交通省の公式資料をもとにした参考推計値です。実測値ではありません。今後のモニタリングにより精度を高めていく予定です。「盛っていない数字」を大切にしています。

## ◆ 生物多様性 — 確認された命

**確認樹木種（フィールド全体 0.5ha）**

スギ・ヒノキ・モウソウチク・ヤマザクラ・コナラ・アベマキ・ソヨゴ・アセビ・カシ・シイ・ヒイラギ・サカキ・ヒサカキ・ネジキ・リョウブ・コバノミツバツツジ・ヤマツツジ・コシアブラ・タカノツメ・アカマツ・チャノキ・ヤブツバキ　など

## ◆ $CO_2$固定量(参考推計値)

| 22 種 | 9.0 t-$CO_2$ | 72 本 | 0.5 ha |
|---|---|---|---|
| 確認樹木種（0.5ha） | 年間固定量（推計） | 4 部門合計伐採本数 | 対象フィールド |

林野庁資料を参考に算出（0.5ha × 18t-$CO_2$/ha/年・推計）。4 部門の活動を通じて合計 72 本を伐採し、林床への光環境が改善しています。

## ◆ 生態系サービスの経済的価値(参考推計値)

| 機能 | 算出根拠 | 年間価値（0.5ha） |
|---|---|---|
| 水源涵養 | 林野庁「森林の公益的機能評価」準拠 | 約 285,000 円 |
| 土砂流出・崩壊防止 | 同上（根系による斜面安定） | 約 140,000 円 |

| 機能 | 算出根拠 | 年間価値（0.5ha） |
|---|---|---|
| 洪水緩和・雨水貯留 | 国土交通省「治水機能評価」参考値 | 約 175,000 円 |
| 生物多様性保全 | 環境省 TEEB 参考値（樹木 22 種確認） | 約 110,000 円 |
| レクリエーション・教育 | 参加者 231 名の活動実績から換算 | 約 75,000 円 |
| $CO_2$固定 | 炭素クレジット市場参考価格(9.0t-$CO_2$) | 約 20,000 円 |
| 年間合計（参考推計値） | — | 約 805,000 円／年 |

**80.5 万円**
0.5ha が提供する無償の価値

**31.5 万円**
防災機能の経済換算（土砂＋洪水）

**67 万円**
地域経済への参考推計

**9.0 t-$CO_2$**
年間 $CO_2$固定量（参考推計）

**RED ZONE — 防災機能の重要性**
本フィールドは土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）に指定されており、継続的な里山整備は防災機能の維持に直接寄与しています。土砂流出防止・洪水緩和の推計値（合計 31.5 万円/年）は、この防災的文脈においてより実態に即した数値といえます。

※上記の数値はいずれも参考推計値であり、実測値ではありません。今後のモニタリング（雨量計・土壌水分計の設置等）により精度を高めていく予定です。

CHAPTER 04

# SDGs・TNFD との対応

*Aligned with global frameworks*

国際的なフレームワークとの接点を整理する

**NOTE** 本レポートは SDGs や TNFD への「準拠」を宣言するものではありません。それらのフレームワークを参考に、この活動が自然・社会とどうつながっているかを整理したものです。

## ◆ 関連する SDGs ゴール

| SDGs ゴール | 活動との対応 |
|---|---|
| Goal 15 陸の豊かさを守ろう | 0.5ha の里山フィールドでの生物多様性の維持・観察・記録。樹木 22 種の確認と継続モニタリング。山賊ワイルドランによる光環境の改善。 |
| Goal 11 住み続けられるまちづくりを | 市外参加者 95%（約 219 名）の来訪による関係人口の創出。都市と農村をつなぐ体験拠点の形成。 |
| Goal 4 質の高い教育をみんなに | 自然体験・ものづくり・生きもの観察を通じた非認知教育。子ども（20%）を含む次世代への里山の知恵の伝達。 |
| Goal 3 すべての人に健康と福祉を | 自然の中での活動がもたらすウェルビーイング効果。都市部参加者の精神的・身体的健康への貢献。 |
| Goal 17 パートナーシップで目標を達成しよう | 地域住民・都市部参加者・企業・行政をつなぐ多主体連携の実践。 |

## ◆ TNFD の LEAP アプローチ(参考整理)

| フェーズ | 考え方 | 草むらの學校での実践 | 今後の課題・展望 |
|---|---|---|---|
| L Locate<br>場所の特定 | 事業・活動が自然資本に依存・影響する場所を地図上で特定する。生態系の感度が高いエリア（保護区・希少種生息域・ハザードエリア）を把握する。 | 【所在地】丹波篠山市倉本 141・西紀中地区（0.5ha）<br>【生態系タイプ】広葉樹・針葉樹混交林（里山二次林）<br>【注目すべき点】<br>土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）に指定。継続的な整備が防災機能の維持に直結するエリア。 | GIS や衛星データを活用した植生マッピングの実施。周辺の農地・水源との関連性の整理。 |
| E Evaluate<br>依存・影響の評価 | 活動が自然資本に「依存」している内容（恩恵を受けているもの）と「影響」を与えている内容（正負両面）を評価する。 | 【依存】木材・広葉樹資源（ツリーハウス建設・きのこ原木）、生物多様性（体験コンテンツの源泉）、景観・文化的資源（参加動機の源泉）<br>【ポジティブな影響】樹木 22 種の生息環境維持、72 本の伐採による光環境改善、里山荒廃の抑制<br>【ネガティブな影響】活動による踏圧・一部植生への影響（モニタリングで継続確認中） | 草本・下草の変化データの蓄積。伐採後の植生回復状況の定点観察。土壌への影響評価。 |
| A Assess<br>リスクと機会 | 自然資本の変化が、事業・活動にもたらすリスク（物理的・規制・評判）と機会（新市場・関係構築・資源活用）を評価する。 | 【リスク】担い手不足による里山荒廃の進行、鹿害・獣害による植生破壊、気候変動による豪雨・土砂崩れリスク（レッドゾーンの特性）<br>【機会】市外参加者 95%・219 名という関係人口の形成、体験コンテンツとしての差別化価値、自然資本データの蓄積による補助金・クレジット活用の可能性 | モニタリングデータの蓄積によりリスクの定量化精度を高める。J-クレジット申請の検討。企業連携プログラムとの接続。 |
| P Prepare<br>開示の準備 | 上記 L・E・A の結果をもとに、情報開示の方針・目標・指標を設定し、ステークホルダーへの報告体制を整える。 | 【本レポートによる開示】活動実績・生物多様性データ・$CO_2$固定量・生態系サービス価値・地域経済効果を整理・公開<br>【開示の姿勢】推計値であることを明記し「盛らない数字」を徹底。TNFD への準拠宣言ではなく「入口」として位置づけ。<br>【更新の方針】年 1 回の定点モニタリングにより実測値への更新を継続 | デジタルアーカイブ化によるリアルタイム開示の実現。第三者によるデータ検証の検討（将来的に）。企業向けレポートへの応用展開。 |

CHAPTER 05

# 来年度に向けて

*Plans for 2026*

小さく、継続して、積み上げていく

「大きくやろう」ではなく、「小さく継続して、積み上げていく」。それが草むらの學校の 2 年目の方針です。

## ◆ 2026 年度の目標

| | | | |
|---|---|---|---|
| **30+ 回** | **250+ 名** | **年 2 回** | **実測 化** |
| 月 2〜3 回ペース（前年 25 回） | 市外参加者の継続参加率を重視 | 定点調査を実施 | 参考推計値→実測値への更新 |

## ◆ 重点取り組み

### モニタリングの強化

フィールド全体での植物種の定点観察を年 2 回実施。昆虫・鳥類データの蓄積を開始。今後、雨量計・土壌水分計の設置により、$CO_2$固定量・防災機能の参考推計値から実測値への更新を目指します。

### 連携の拡大

企業向け体験プログラム（ユニトピア・キクヤ）との連携強化。淡路景観園芸学校・澤田准教授との学術連携。市内事業者・地域住民との接点づくり（地域住民比率 5% → 15% へ）。

### 将来構想 — デジタルアーカイブ化

参加者が Web フォームに活動データを入力すると、自動でレポートが生成・PDF 化される仕組みの開発を検討しています。蓄積されたデータはデジタルアーカイブとして公開され、次の参加者が「前の参加者が何をしたか」を参照できる引き継ぎの基盤になります。

**記録が循環する。それが、この場所の自治の仕組みになっていきます。**

## ◆ 山林の整備前後比較

CHAPTER 06

# 次の人へ — 引き継ぎ書

*A letter to the next steward*

この最終章が、次の参加者の最初のページになります。

## 次にここに来る人へ

丹波篠山市倉本のこのフィールドは、2025 年の 1 年間で 25 回、231 人が訪れた場所です。

大半は、ここから遠い場所に暮らしています。神戸、大阪、東京——。それでも、週末になるとここへ来て、木を切り倒し、路を切り拓き、アクティビティーの場を増やしました。

活動の象徴とも言うべきツリーハウスは、まだ完成していません。あなたが次にここに来るとき、このツリーハウスはあなたを待っています。

樹木 22 種が、この 0.5ha に生きています。スギ、コナラ、ヤマザクラ、ヤブツバキ——名前を覚えることが、この場所を自分のものにする最初の一歩だと思っています。

この 1 年間で、約 9.0t-$CO_2$がこの森に固定されました(参考推計値)。数字よりも、実際に光が差し込んだ林床の様子を見てほしいです。

**次の担い手へ——この場所を、どうかよろしくお願いします。**

草むらの學校 参加者一同 ／ 2025 年 12 月

### ◆ フィールドの現状記録(引き継ぎデータ)

| 項目 | 2025 年 12 月時点 | 次回確認推奨 |
|---|---|---|
| ツリーハウスの状態 | 建設継続中（順次拡張） | 2026 年春〜夏 |
| 確認樹木種 | 22 種(フィールド全体 0.5ha) | 2026 年秋 |
| 光環境（4 部門 72 本伐採後） | 林床への光が改善。植生回復を確認中 | 2026 年夏〜秋 |

| 項目 | 2025 年 12 月時点 | 次回確認推奨 |
|---|---|---|
| きのこ原木の状態 | 植菌済み・発生待ち | 2026 年秋〜冬 |
| 生きものデータ | 記録開始中（今後継続蓄積） | 次回生きもの部で計測 |

**NOTE** このレポートを受け取った方へ——本書は草むらの學校の 1 年間の記録です。企業・団体の皆様が地域の自然資源に関わる際の参考として、また自社の活動を記録・開示するレポートのサンプルとしてご活用ください。詳しくはミドリカフェまでご連絡ください。

PROPOSAL FROM MIDORI CAFE

# ミドリカフェが提供できること

*地域と企業をつなぐ、実践型プロデュース*

ミドリカフェは「コンサル会社」ではありません。実際に里山に入り、木を切り倒し、路を切り拓き、体験を設計し、記録してきた実践者です。

**「地域で実証してきたことを、企業・団体の皆さんと一緒に形にします。」**

### ESG 体験プログラムの設計

1 泊 2 日〜日帰りの体験プログラムを、社員研修・地域共創・ウェルビーイングの文脈で設計します。単に「良い活動」ではなく「継続できる仕組み」として設計します。

### 地域連携型プログラムの企画

丹波森林 LSC（15 団体加盟）・ユニトピアささやま・萩原珈琲など、地域のネットワークを活かした体験を企画します。

### 自然資本の可視化・整理

$CO_2$固定量・生物多様性・地域経済効果を、「盛らない・誠実な数字」で整理します。林野庁・環境省の公式手法に準拠した参考推計値として提供します。

### TNFD/SDGs 視点でのレポート化

本レポートのような自然資本活用レポートを作成します。既存のサステナビリティ報告書に組み込める形式で提供します。

### 継続モニタリング

淡路景観園芸学校（兵庫県立大学）などとの連携のもと、植物種数・光環境・$CO_2$固定量の継続調査を設計・実施します。

### 関係人口・流域自治の形成

一度きりの体験で終わらない継続的な関係性を設計します。草むらの學校のように「市外 95%・25 回・継続」という実績をともに積み上げます。

### ストーリー設計・活動アーカイブ

活動の記録・写真・参加者の声を「引き継ぎ書」として蓄積するアーカイブを設計します。組織の記憶として残る形で整理します。

**地域との中長期的な伴走**

丹波篠山市・自治体・地域金融機関・観光施設との連携を含めた、地域全体の自治の仕組みづくりを伴走します。

**MESSAGE**

地域との関わり方を模索する企業・自治体・教育機関・観光施設のみなさまへ

「ESG 対応のためだけ」ではなく、「地域とどう関わるか」を一緒に考えたい。
草むらの學校のこのレポートは、そういう出会いのための一枚です。

---

**株式会社ミドリカフェ 代表取締役 内田圭介**
info@midoricafe.jp ／ midoricafe.jp
兵庫県丹波篠山市